BOOK IX — 自由の代償

# 第07章 — 特殊部隊

## 01 — 窓の向こう側

イマニが病院を出ることで生じる問題について説明を終えた頃には、軍用機の姿はもう見えなくなっていた。ロイは説明を聞く前から、その結果を理解していた。分かっていなかったのは、医療の助けを受けられなくなれば、いかに多くの日常的なことが困難になるかということだった。

彼女はロイの負傷と、これまでに受けた治療の記録をレイチェルに手渡した。そこには新たな許可も、市内の通行を認める文書もなかった。別の医師の役に立つかもしれない情報だった。

「診てくれる人が見つかったら」とイマニはロイに言った。「自分がどれだけ元気かを話す前に、それを渡してください」

彼はそうすると約束した。

エイドリアン・タイレルが廊下で待っていた。リンは研究資料の目録作成を終えるため、下の階に残っていた。試料は病院に置いておくべきものだったし、ロイとレイチェルがどこへ向かうにせよ、そこでは実験装置もほとんど役に立たないだろう。

エイドリアンはその日の午後に得られた観察記録の写しをレイチェルに渡した。

「ここに書いてあることを、自分たちだけで試そうとしないでくれ」

「分かっているわ」

「彼に言ったんだ」

ロイは反論せずにその忠告を受け入れた。損傷した身体を、何の損傷もない身体と同じように動かそうとすればどうなるのか。そのことを学ぶのに、彼は今日の大半を費やしていた。もう一度確かめる必要はなかった。

廊下の突き当たりで、看護助手が老人を別の椅子に移そうとしていた。別の病棟から運ばれてきた二つ目の椅子は幅が狭すぎた。看護助手は詫び、一度その場を離れ、三つ目の椅子を持って戻ってきた。

ロイは老人がその椅子に落ち着くのを見つめた。

一週間前なら、ハヴェルの死は一つの闘いの終わりに思えただろう。これからのことを考える時間が与えられるのではないかと、彼は想像していた。実際には、一つの建物から出られるかどうかを決める人間の数が増えていた。

レイチェルのもとに評議会の代理人から連絡が入った。独立した再審査は延期された。代理人には新しい日程も知らされていなかった。政府の代表者が、予定されている移送に対する評議会の管轄権に異議を唱えたという。

「停止措置はまだ解除されていないわ」と彼女は言った。

エイドリアンは中庭に目を向けた。

「もう解除する必要さえないと考えているのかもしれない」

下の階のどこかから、扉が閉まる音が聞こえた。それに続き、院内放送が職員に対し、いつでも指示を受けられるよう待機することを求めた。

理由は告げられなかった。

## 02 — 指揮権の移行

デレン大尉が新たに到着した人員を初めて目にしたのは、管理棟だった。彼らの制服は、デレンとともに病院に来た人員のものとは異なっていた。所属を示すものが少なく、自己紹介をした将校も、施設内の案内を求めなかった。

その男はヴェイル大佐と名乗った。国防事務局と軍の参謀本部による共同指令に基づき、地区全体の作戦指揮を任されていた。

彼はテーブルの上に書類を置いた。

デレンは一枚目を読み、次に二枚目を読んだ。配下の人員は新たな指揮の下で任務を継続することになっていた。機密指定された三人のレプリカントは、引き続き確保作戦に投入できる状態に置かれる。病院の警備に関する責任は直ちに移管されることになっていた。

「医療上の理由による停止措置はどうなりましたか？」とデレンは尋ねた。

ヴェイルは、軍医がすでに記録を調べていると答えた。

「評議会の停止措置については？」

「評議会に関する指示は受けていない」

デレンは最後のページを開いた。追加部隊の展開を承認する文書にヴェン将軍の名前があった。病院に関する項目は、別途承認されていた。

「将軍がこの指揮権の移行を承認したのですか？」

「統合参謀本部だ」

ヴェイルは質問されても気を悪くした様子はなかった。デレンが将軍の執務室に連絡する間、黙って待っていた。応答した補佐官は、ヴェンが緊急説明会に出席しており、話すことはできないと告げた。

サトウ軍曹は扉のそばに立っていた。ガラス越しに、かつて事務用品の保管に使われていた部屋へ機材を運び込む兵士たちが見えた。彼らは独自の通信要員、医療スタッフ、通訳を伴っていた。一人が足を止め、病院職員が棚を移動させるのを手伝っていた。

その何気ない光景に、彼女は軍用機を見たとき以上の不安を覚えた。

通話が終わると、ヴェイルはデレンに機密指定人員を紹介するよう求めた。

M-04が残る二人とともに現れた。三人は、大佐による任務変更の説明を聞いた。誰もその理由を尋ねなかった。退出を命じられると、彼らは入室したときと同じ順序で部屋を出ていった。

「彼らは大佐の部隊に編入されるのですか？」とデレンは尋ねた。

「いや」

「では、誰が彼らを指揮するのですか？」

ヴェイルはテーブルの書類をまとめた。

「この作戦が続く間は、私だ」

## 03 — 階級章のない人々

病院の管理責任者がヴェイルに付き添って治療棟を回り、その間に補佐官が使用中の病室の数を記録した。管理責任者は、移動させることのできない患者もいると繰り返し説明した。ヴェイルは、停電が起きた場合に必要となる機器の一覧を求めた。

彼は苛立つ様子も、安心させようとする様子も見せなかった。彼がすべてを自分で処理する必要のないよう、それぞれの任務を遂行できる人員を連れてきていた。

玄関ホールでは、若い兵士が看護師と話すためにヘルメットを脱いでいた。学校を卒業して間もないように見えた。看護師は彼がレプリカントなのかと尋ねた。

「いいえ」

彼女は謝った。兵士は首を振り、子供たちがどこで治療を受けているのか、説明を続けてほしいと言った。

少し離れたところでは、機密指定の輸送車で到着した女性が、部隊の別の隊員の話を聞いていた。以前と同じ灰色のコートを着ていた。兵士は軍で用いられる識別呼称で彼女に話しかけた。彼女はごく普通の声で答えた。

サトウは二人が別々の方向へ歩いていくのを見ていた。以前の展開時には、機密指定人員はほかの者から隔離されているように見えた。軍のほかの人員には、彼らの存在について尋ねないよう指示されているかのようだった。だが、新たに到着した兵士たちの間では、彼らはほとんど注目を集めなかった。

サトウはかつて受付だった場所の近くでデレンを見つけ、自分が見たことを伝えた。

「以前にも彼らと任務に就いているんです」

「そういう者もいるのかもしれない」

「誰も、彼らが何者なのか尋ねていません」

デレンは改訂された人員名簿に目を通した。いくつかの項目には彼の知らない部隊が記載されていた。名前ではなく番号で記された項目もあった。この地区の兵士のうち何人が人間なのか、灰色のコートの三人が機密指定人員のすべてなのか、彼に知る術はなかった。

サトウはそれを調べるつもりなのかと尋ねた。

「責任を問われる前に、何に対して責任を負っているのか知っておきたい」

彼の端末に通知が届いた。残されていた指揮権限も地区作戦に組み込まれたという。受領確認には彼の署名が必要だった。

彼は画面が暗くなるまで、その通知を読んでいた。

病院の外では、M-04を運んできた車両の後ろに二台目の輸送車が停まっていた。乗員は建物には入らなかった。二人が車両の扉の近くに立ち、一人は車内に座ったまま、雨がガラスに溜まっていくのを眺めていた。

## 04 — 住所のない行き先

午後七時を少し過ぎた頃、レイチェルとロイは管理棟の廊下に着いた。そこでエイドリアンと会うことになっていたが、病院は移送の承認権限を持つ者が誰なのか法務担当者が確認するまで、新たな移送書類の発行を停止していた。

二人は書類の山に囲まれた事務員を見つけた。彼女は軍からの要求書に名前が記された患者の記録を渡さないよう指示されていた。その名簿に載っていたのはロイの名前だけだった。

レイチェルは、すでに患者の手元にある写しにもその制限が適用されるのかと尋ねた。事務員は、誰からも説明を受けていないと答えた。

「私たちのために、あなたがそれを判断する必要はないわ」とレイチェルは言った。

事務員は安堵したようだった。その日だけでいくつもの政府命令の解釈を求められていたが、それらを書いた者に直接話を聞く機会は与えられていなかった。

ロイは壁際に腰を下ろした。肩がまた痛み始めていた。イマニからは長時間立ち続けないよう指示されていた。誰にも求められていない自立の証明のために、体力を無駄に使うつもりはなかった。

一人の女性が移動許可証を手に法務室から出てきた。夫の移送を担当する運転手がどこにいるのか、事務員に尋ねた。事務員は電話をかけた。通話が終わると、女性は礼を言い、エレベーターのそばへ待ちに行った。

レイチェルは手にしていた診療記録に目を落とした。

二人には運転手もいなかった。行き先も確定していなかった。すべての疑問に答えが出るまで病院に留まっていれば、やがて誰かがその両方を決めることになる。

廊下の突き当たりにエイドリアンが現れた。別の施設の医師と話ができたという。その医師はロイを診察することには同意したが、現在の制限下では入院を保証できなかった。その病院にも地区作戦に関する同じ通知が届いていた。

「名前は聞かせないでくれ」とロイは言った。

エイドリアンは理解し、端末をしまった。

数秒間、誰も口を開かなかった。かつてのロイにとって、研究施設や政府の公文書保管庫へのアクセスを確保できるエイドリアンの能力は、並外れた力に思えたかもしれない。今、その科学者には、一人の患者が二つの病院の間を自由に移動できるかどうかさえ確認できなかった。

「下の階での研究は続けられる」とエイドリアンはレイチェルに言った。「全部ではないが、何かを知るには十分だ」

彼女はうなずいた。それは、その夜に耳にした中で最も良い知らせに近いものだった。

そのとき、法務担当者が扉を開けて現れ、ロイと話がしたいと言った。

## 05 — 身柄の移管

法務担当者はマーサーと名乗った。担当医の同意なしに患者を軍の拘束下に引き渡すよう、病院に強制できるのかどうか。その判断を求めて、午後の時間を費やしていたという。

彼は政府の最新の指示書の写しを持ってきた。軍医は、ロイの状態が移送に耐えられる程度に安定していると結論づけていた。その判断に対する病院の同意は、指示書の要件に含まれていなかった。午後八時に確保部隊が彼の身柄を拘束することを認める内容だった。

マーサーは、その知らせを伝えなければならないことを詫びた。

「その医師は彼を診察したんですか？」とレイチェルは尋ねた。

「記録を調べました」

「では、一度も会ったことのない人間について判断したんですね」

マーサーはその異議をすでに申し立てていた。独立した再審査が行われるまで、評議会の停止措置を認めるようにも求めた。どちらにも実質的な回答はなかった。

ロイは、病院が引き渡しを拒否した場合に何が起こるのかと尋ねた。

マーサーは軍に占拠された事務室の方を見た。「彼らは私たちに引き渡しを求めるつもりはないと思います」

指示書に記された時刻まで、あと二十三分だった。

ロイは立ち上がった。そのとき、背中にレイチェルの手を感じた。それをありがたいと思う自分に、一瞬、苛立ちを覚えた。だが、彼女に目を向けると、その感情は消えた。

マーサーは、病院が彼の退院を認めたわけではないと説明した。この先何が起きようとも、元の診療記録には、彼が患者であると記載され続ける。その事実は繰り返して伝えるほど重要だと考えているようだった。

「あなたを拘束する者を変えることはできる。ですが、あなたが同意したと私たちの記録に書かせることはできません」

ロイは礼を言った。

エイドリアンは管理棟と病棟を結ぶ分岐点まで二人に同行した。そこから研究棟へ向かう通路は、反対方向に延びていた。

レイチェルは最後の目録受領証を彼に渡した。彼はそれを折りたたみ、上着の内側にしまった。次にいつ会えるのか、約束を交わすことはなかった。

ロイは、エイドリアンが握手を求めようとして、負傷を思い出し、思いとどまったことに気づいた。

彼は代わりに左手を差し出した。

二人は握手した。

それからロイとレイチェルは廊下を進み、エイドリアンは研究室へ戻っていった。

## 06 — 二度目の対峙

西側の入口でロイが最初に見覚えのある人物として認めたのは、M-04だった。

男は前の晩から明滅を繰り返している照明の下に立っていた。その向こう、ガラスの外側では、数人の兵士が小声で話をしていた。ロイの姿を見ると、彼らは話をやめた。

M-04は入口が閉鎖されていると告げた。

「別棟には行かない」とロイは言った。

「まだ、あなたをそこへ連れていくよう指示されてはいません」

レイチェルは、別の入口から出ることはできるのかと尋ねた。

男は彼女を見た。「あなたは出られます」

背後で誰かが動く音がした。ロイが振り返ると、管理棟の廊下から灰色のコートの女性が近づいてくるのが見えた。人間の将校が同行していた。どちらも急いでいるようには見えなかった。

数日前なら、ロイは恐れるだけの理由を持つ身体能力の高い二人に意識を集中させただろう。だが今、彼は将校や外の兵士たち、さらにその向こうの窓の前を通過する人影に目を向けていた。彼らは一人ずつロイを打ち負かす必要などなかった。

ロイは八時になれば何が起きるのか、M-04に尋ねた。

「指示を受けます」

「どんな指示か、もう分かっているだろう」

M-04は答えなかった。

ロイは扉に向かって一歩踏み出した。男がロイとガラスの間に移動した。ロイは動きの始まりを捉えようとした。だが見えたのは、男の位置が変わったという事実だけだった。

今度は、彼を殴ろうとはしなかった。

身体が触れ合う前に足を止めた。

レイチェルは、ロイの腕の緊張が伝わるほど近くにいた。ロイは、結局訪れることのなかった衝撃に備えていたのだ。負傷した肩が固定具の下で強張り、痛みが胸に広がった。

「ここでは駄目よ」と彼女は静かに言った。

M-04はロイの肩に目を向けた。その表情に満足の色は見られなかった。次の指示が出されるまでは病棟に戻ってもよいと、二人に告げた。

女性は二人を通すために脇へ寄った。ロイは彼女の手を見ずに、その横を通り過ぎた。

二人は病棟には戻らなかった。

## 07 — 八時の命令

ヴェン将軍がデレンの報告書を受け取ったとき、緊急説明会はまだ続いていた。彼女はテーブルの下でそれを読みながら、北部地区を統一的な管理下に置く必要性を語る文民の政府高官の話を聞いていた。

報告書にはマーサーの異議と、病院の医師による勧告が含まれていた。移送先として予定されている軍の施設は、別の機関によって適切であると認定されていた。だが、そこの装置がロイの個別の負傷に安全に対応できるかどうか、誰も確認していなかった。

ヴェンは議長に、確保作戦の再開を誰が承認したのか明らかにするよう求めた。

議長は作戦指令が説明会に先立って採択されたと告げた。機密指定人員と特殊部隊は、統合指揮下で行動するという。その回答は、患者に関する彼女の問いには答えていなかった。

「私は医療上の理由から確保作戦を停止させました」と彼女は言った。

「医療上の理由については再審査が行われました」

彼女は軍医の所見を求めた。議長はそれを配布すると約束した。

病院では、デレンが端末の時刻が変わるのを見ていた。一つの指示が発効した。ロイの捜索を建物の内部で進めることが許可された。

サトウは中庭で彼の隣に立っていた。雨は激しくなっていた。入口付近の水たまりに、車両のライトが映っているのが見えた。

ヴェイルの指揮部は、作戦の影響を受ける患者の支援を彼女の分隊に割り当てた。再びロイを取り押さえる必要のない任務であることに、彼女は安堵した。その安堵は、最初の人々が受付から連れ出されるのを目にするまでしか続かなかった。

その中に、娘を迎えに来た女性がいた。軍は病院を閉鎖するつもりなのかと尋ねた。サトウは病院が引き続き機能していると答えた。

「では、なぜ中に入れないんですか？」

サトウには無許可の立ち入りに関する指示が与えられていた。そこに、女性の問いに対する答えはなかった。

管理棟では、対象者が指定された病室にいないことがヴェイルに報告された。彼は次の段階を承認する前に、民間人の状況に関する最新の報告を求めた。補佐官は、病院の法務担当者が捜索に異議を唱えていると伝えた。

ヴェイルはその異議を記録するよう指示した。

捜索は続けられた。

## 08 — 最初に失った場所

ロイとレイチェルが旧診断棟の近くまで来たとき、院内放送が病院の各部門間の移動を制限すると告げた。患者には、次の指示があるまで現在いる場所に留まるよう求められた。

二人がたどり着いたのは、改修工事のためにいくつかの診療室が閉鎖されている一角だった。作業員が診察台に覆いをかけたままにしていた。いくつかの扉の上では照明が消えていた。

窓越しに、屋根付きの通路の下に人々が集まっているのがロイには見えた。病院職員もいれば、見舞いに来たらしい人々もいた。一人の兵士が本館へ誘導しようとしており、人の群れがゆっくりと動いていた。

レイチェルは彼の隣で足を止めた。

まだ引き返すことはできた。兵士たちに向かって歩き、M-04が来るのを待ち、彼らが自分のいるべき場所と決めたところへ連れていってもらえばいい。初めて、その選択肢が身体にとって魅力的にさえ思えた。歩き続けなくて済む。肩の痛みからも解放される。そして、歩き続けるだけで精一杯の自分のそばにいてくれと、レイチェルに頼む必要もなくなる。

ロイは自分の考えていたことを彼女に話した。

「そのあと、出ていくことを許されるの？」と彼女は尋ねた。

彼は何も言わなかった。

二人は病院の敷地の反対側へ向かって進み続けた。屋根の一部が取り除かれた場所では、雨の音が大きくなった。ロイはレイチェルが冠水した床を渡り終えるのを待ち、そのあとに続いた。固定具の下の筋肉が震え始めているのが分かった。

外では、病院の先の道路が軍用車両のヘッドライトに照らされていた。車両の間に隙間が見えると思っていた。だが実際に見えたのは、遠くまで続くさらに多くのライトだった。それらは朝には通行できた通りにまで延びていた。

レイチェルは反対方向を見た。病院の敷地内には、まだ移動している人々の姿があった。交差点には救急車がライトを点滅させたまま停まっていた。どうやら先に進めないらしかった。

彼女はロイの手を取った。

背後から二人を呼ぶ声がした。その声にも、屋根付きの通路の下に現れた人物にも、ロイは覚えがなかった。将校は二人に止まるよう命じた。建物のもう一方の端にも、さらに人影が現れた。

そのうちの一人は灰色のコートを着ていた。

ロイは再び道路の方を見た。街はすぐそこにあった。病院の塀の向こうの高架区間を通る車両の音まで聞こえた。彼はその夜ずっと、そこにたどり着こうとしていた。だが今は、たどり着いたからといって、逃れられたことにはならないと分かっていた。

彼はレイチェルの手を離し、彼女の前に出た。

彼女は彼の名前を呼んだ。

ロイはすぐには答えなかった。近づいてくる人々の動きは、かつて彼を追ってきた者たちのものとは違っていた。倒せばこの状況を変えられるような相手を、一人として見いだすことができなかった。

彼はM-04との遭遇を生き延びた。そのことを、自分が直面している危険の大きさを測る尺度と取り違えていた。

背後には病院があった。前方には軍がいた。

軍用機が到着して以来初めて、彼は自分たちが閉じ込められた場所がどれほど広いのかを理解した。

第07章 終。